雑事記（44）

盛丘　由樹年

今回は
・戦争遺跡探訪
・反戦歌抜粋
・仏像探訪・番外編
の３本立てとなっている。

戦争遺跡探訪（15）

①火薬工場跡（埼玉県深谷市）2022/7/30

暑い中、深谷市を訪ねた。櫛挽（くしひき）地区の旧陸軍火薬工場跡を見たかったから、この最寄り駅として、八高線の用土（ようど）駅から歩いた。ここからでも、北東方面に約４キロの道のりがある。バスの便が不明だったから、約一時間、区画整理された単調な道を歩いて、目的地にたどり着いた。

深谷市には、戦争中、火薬製造関係の工場が三つの地区に分かれて造られた。その一つはもともとレンガ工場だったという。東京の板橋にあった火薬工場を移転・拡張する形だった。約１年の操業が終戦まで続き、その後、工場は解体され、その広大な土地はほとんど民間の手に渡された。

深谷市櫛挽の弾薬工場跡

ここ櫛挽地区は、もともと畑地だった。火薬工場が撤去された後、農業や酪農の生産地に戻された。今ではこの周辺の一部は市街化が進んでいる。

事前の情報どおり、それは畑地の中にぽつねんと建っていた。角ばった、黒ずんだコンクリート構造物だ。火薬を製造する工程のための建屋の一部だったという。火薬を扱うために頑丈に作られたのだろう。それが畑の中に放置されている。

なぜこれだけが残されたのかと考えると、あまりにも頑丈な造りだから、土地の所有者にとって解体がめんどうだった、というような理由だろう。

柵で囲っているわけではないし、出入り口もふさがれていないから、不審者の私は自己責任で内部に入って見学した。ただし一般の人は、畑地の中に踏み入らない方がよい。

さて、次の目的地として、ＪＲ深谷駅から北東にある原郷（はらごう）地区へ行き、別の火薬工場の建物跡を見ようと考えていた。しかし、この日は暑く、道は遠かったから（櫛挽から深谷駅まで約６キロある）、バスの便を期待し、それに乗りたかったが、主要道路に出ても、バス停に書かれた時刻表では絶望的なほど便数が少なく、結局、ＪＲ深谷駅まで歩いた。（コミュニティバスが利用できたかもしれないが、私は知らなかった）

途中、気まぐれを起こして、道なりにあった仙元山（せんげんやま）公園に上ったものだから、体力をなくし、かつ、下山のときに、いいかげんな方向の道に出て、大きく遠回りしてしまった。

深谷駅にたどり着くのが精いっぱいだった。原郷地区に行くのはあきらめた。そこへ行くにも２キロあるから、もううんざりだった。深谷駅の華麗な駅舎を写真に取ってから、深谷駅から新宿駅まで快速電車に乗りこんだ。深川駅北側へは、また機会があれば訪ねてみたい。

②憲兵詰所跡（東京都北区滝野川）2022/8/5

北区滝野川に、戦争中からある建造物があると知り、板橋駅から歩いて訪ねてみた。石神井川を渡る滝野川橋の近くに物置のような、あるいは倉庫のような、黒ずんだコンクリート構造物だ。

民家と、ほとんど隣接する角地にあって、よく解体されなかったものと感心する。ただ、だれが管理者かは知らないが、建屋周辺に雑草が伸びてきており、ろくに管理されておらず、放置されているようにもみえる。

滝野川・憲兵詰所跡

これは憲兵詰所跡と言われている、しかし、高さ2・5メートルほどの長方形の建屋だ。しっかり戸締りされ、中を見ることはできないが、内部の狭さが推測される。人が寝泊まりすることはできないだろう。ろくに窓もついていないし、夏は暑そうだから、人が長時間なかにいるのは耐え難いことだったかもしれない。

一説に、東京第一陸軍造兵廠の十条工場〜滝野川工場の間にかつて敷設（ふせつ）されていた軍用貨物線の見張りのために造られた建造物とされる。線路際にあったのなら、可燃物を貯蔵していた「ランプ小屋」の可能性もありそうだ、と私は思いついた。ランプ小屋については、毎日新聞朝刊 2022/9/10 の今週の本棚「ランプ小屋の魔力」の記事を参照のこと。

それはともかく、ここはその本部事務所（現・北区立中央公園文化センター）にも近いから（２００メートルほどの距離にある）、軍関連の施設であることは確かだろう。

続いて、そこから西方に８００メートルほど歩き、埼京線を横切り、次の遺構を見に行った。

③陸軍板橋火薬製造所跡（東京都板橋区加賀）
2022/8/5

同じ石神井川沿いに加賀公園がある。ここは江戸時代、加賀藩の下屋敷があったところだが、明治政府が接収し、軍用にした。その後、庭園の築山だった部分は、今は公園として一般に開放されている。広くはないが、樹木が伸びており、一休みするのにちょうどい

い。

陸軍板橋火薬製造所跡
加賀公園とのフェンス越しに撮影

陸軍がこの辺一帯を火薬開発の拠点の一つとして利用し、火薬の研究が行われていた。戦後も使われ、加賀公園の隣の敷地内は、野口研究所と呼ばれ、研究施設として近年まで物理学の研究が行われていたそうだ。

板橋区で保存する動きがあり、今では手付かずのままになっている。しかし、建物のいくつかは廃墟同然であり、崩壊の危険があるようで、一般の人が敷地内に立ち入ることはできない。

金網のフェンス越しに外から、敷地内を眺めることができる。中には、いくつかの建屋や土塁、実験設備が見える。写真に写る背景のビル（集合住宅）は無関係。白い二階建てのビルが主な研究施設だった。手前まで伸びている管が、弾道を測定するためのもので、火薬の性能を測った。

公園の築山には、コンクリートで固められた部分がある。ここを標的にして銃弾を打ち込んでいたという。あの管がここまで伸びていたわけだ。

これらを見てから、私は、埼京線沿いを歩き、十条駅へ向かった。

④東京第一陸軍造幣廠外壁跡（東京都板橋区十条台）2022/8/5

埼京線の線路沿いにあるレンガ塀を、ついでに見てきた。その東側は十条台であり、今では自衛隊の駐屯地や、各種学校があるが、かつて十条台には、東京砲兵工廠銃砲製造所があって、広い土地を占有していた。その名残の一つとして、レンガ塀が残っている。

試射の標的跡

板橋区加賀公園内のかつての築山が的（まと）になっていた。

レンガ塀跡

写真の中央の塀に、その説明板がついている。

その昔、兵器工場の建屋などの建築資材としてはレンガが使われていた。

今は、電車の騒音の防音壁として役立てられている

のだろう。線路と学校地区を隔てている、線路の東側の塀がそれであり、コンクリートで補強されているから、一見しただけでは、わかりにくい。

埼京線・十条駅から南に３００メートルほどのところにある踏切のところで、その壁の様子がよくわかる。

埼京線のこの区間は高架にすることが予定されているというから、そのとき、この塀の役目を終えるのかもしれない。

⑤成増飛行場の掩体壕跡（東京都練馬区成増）

2022/8/19

軍用飛行場の周辺には、主に戦闘機を隠すための掩体壕が多く造られた。空襲を受けても簡単には破壊されないように、コンクリートで頑丈に造られた。

成増飛行場は東京２３区内にあって、空襲の危険が迫って、帝都防衛のため、戦闘機を発進させるために、急遽作られた。飛行場はここだけでなく、あちらこちらに整備した。この近辺の例をあげると、調布、立川、所沢にあった。軍部の強引なやり方に、立ち退かされた住民たちには不満が募ったという。

その跡は、光が丘公園となっている。この周辺にいくつか掩体壕が造られたが、現存しているのは一基だけだという。しかも、この掩体壕は、民間住宅の基礎部に転用されて、完全な形ではない。

私は、８月１９日（金）に新宿と池袋を経由して成増駅に来た。ここから歩ける範囲内に目的地がある。

旧成増飛行場の掩体壕跡
円弧状のコンクリートの中が物置として利用されている。

成増飛行場の唯一の形見として、その存在が一部の

人に知られている。この掩体壕は住宅の下部にあるから、かなり正確な位置情報を得てからでないと、探すのは困難だ。その住宅所有者の個人情報などは、明かされないことになっているから、さらに難しい。

おおよその情報を得ていた私も、周辺道路を歩いていただけでは、見つけられなかった。注意しながらうろうろして、ようやく特徴ある形のコンクリート部分を見出した。近づいてそれを確認するためには、積極的に細い路地に踏み込んで行かなければならなかった。

ここから光が丘公園の一つの入り口に近いから、見学と散歩を兼ねて、中に入った。そして大江戸線の光が丘駅まで歩いた。

公園の中は、平日だというのに、人手が多かった。夏休みだからだろうか。野外のスポーツ施設が整っており、若い人たちが思い思いに運動していた。いくつかの休憩所の建屋が巨大で芸術的なことに驚く。そのベンチで寝そべっている中高年も何人かいた。でも、ホームレスではなさそうだ。

歩きながら、遺構らしいものを探したが、見つけられなかった。飛行場だったというから、平地だろうと思ったが、意外と盛り土があったりして、起伏が多くある。全体的な敷地は、確かに飛行場の形跡になっている。

さて、大規模な光が丘団地も通り抜けて、地下鉄大江戸線・光が丘駅から練馬駅に出ようとしたが、途中に豊島園駅があることに気づき、寄ってみることにした。「としまえん」は２０２０年８月に惜しまれて閉園し、都の主導で再開発が予定されている。当然、今は工事の準備中で中に入れない。

正門近くの高み（練馬城址の一部だったという）に「古城の塔」があり、戦争中の一時期、ここの屋上が「練馬防空監視哨」の役を果たしていたという情報があり、私は外からでもその外観を見たいと思った。

防空監視哨とは、飛来してくる敵機を監視し、その機種や数、高度・速度・方向などの情報を、人が確認して本部に伝える拠点のことだ。首都圏各地に配備された内の一つだった。この辺りでは、この塔の上が一番高く、見晴らしがよかったためらしい。

古城の塔はとしまえんの開園時１９２６年からある、英国式古城を模した建築物で、今では、廃墟の様相を呈しているという。定まった用途はなく、各時代、多用途に使われていた。名称も変遷した。その用途の一つが防空監視だったわけだ。

私は若い頃から何度かとしまえんに来たことがある

が、古城の塔にほとんど気づかなかったほど、影の薄い存在だった。でも、としまえんのシンボル的存在だったし、それなりの建築的価値があるとされるから、解体に反対する声が上がっている。

正門付近からよく見えるという情報があるのだが、正門前の広場一帯は板状の「工事中の塀」で囲われ、正門には近づけなかった。外周を回ってみたが、この塀がやたらと高く（刑務所の塀を思わせる）、さらに欝蒼（うっそう）とした樹木に覆われていたから、それらしい建物は見つけられなかった。もう解体されたのだろうか。という疑念が浮かんだ。

あきらめて、正面入り口に近い西武池袋線の方の豊島園駅から帰った。

⑥根府川駅の機銃掃射跡（神奈川県小田原市片浦）

2022/10/1

根府川駅のホームの屋根や待合室に機銃掃射の跡が数十か所残っているという情報を得て、土曜日の朝、出かけてみた。根府川駅は小田原駅から二つ目の、東海道線の駅だから、私の場合、比較的近い。以前にこのシリーズで、二宮駅のホームの屋根に銃痕が残っていることや、神社の鳥居、古い鉄橋などに銃痕が見えることを紹介したから、またかと言われそうだが、それだけ、鉄道網や橋などは攻撃の重点的な対象にされたということだ。

ＪＲ根府川駅のホームの天井梁にある銃撃跡
ちょうど上り電車がすべりこんで来た。

駅に着くと、早速私は上りホームに向かった。渡り廊下から上りのホームに降りてゆく階段のとこ

ろで、左側の梁の木材に大きな銃痕が見える。斜めに銃弾が貫通した後だ。

木材を合わせてボルト止めし、補修（補強）している。そのとき天井部分が大きく破損したはずだが、それらは修復されている。

米戦闘機による空襲が小田原地方では昭和２０年７月末ごろに多くあったから、その時のものだろう。

ホーム天井を見つめながら、歩いていくと、それらしい跡がいくつか見つけられる。特に、待合室の上部の壁には直径１センチほどの穴が多くあり、米軍戦闘機の機銃によるものとしてはやや小さめだが、単なる節穴ではなく、貫通痕だろう。私は情報提供者より多くは見つけられなかったけれど、それらが機銃掃射されたものであることは間違いない。

ＪＲは特にこれを保存しようとしたわけではなく、ホーム上の設備を新しく建て替える計画がなかったからそのまま残されたようだ。昭和８年に建てられてから長い年月を経ているが、全面的な建て替えはされていない。根府川駅は乗降客数が少ないことが幸いしたようだ。ちなみにここは無人駅（リモートで管理されている）だ。

「おや？　下りのホームに降りたのに、上りのホームに行って、上を見ながらうろうろする、怪しいヤツがいるぞ」と、監視カメラでしっかり見られていたりして。

根府川駅から歩いてほど近いところに、根府川公民館がある。この場所に、かつて高射砲陣地が設営されていたという。私はこの跡も見たかったから、駅を出た。

眼下に海が見える。ここに高射砲陣地があったとわかるものは、石碑以外何もない。１９８８年に敷地の一隅に建立されたものだ。その石碑には、短歌が刻まれている。その所属していた元兵士が、その後、この地に再訪した時、詠んだものだろう。

訪いくれば
　　要塞たりし
丘高く
　　公民館の白き
　　映えおり
　　正男

それらを見たあと、私はぶらぶらと、根府川周辺のいくつかの「観光名所」を見て回った。寺山神社、根

府川関所跡と釈迦堂を見た。私が特に推奨するほどのものではないけれど。それぞれ案内板がしっかり整備されているから、行きやすい。釈迦堂には、地下室的な洞(ほら)の中に石像があった。人が近づくと、照明が灯る仕掛けになっていた。

なお、機銃掃射の跡については、何も説明はなかった。

［エッセイ］　反戦歌抜粋

歌い継がれる反戦歌がある。流れるような叙情的なメロディーだったりして、優れている曲が多い。反戦ソングといえば、１９６０～１９７５年のベトナム戦争のころに流行(はや)ったものかもしれない。そのいくつかは時代を超えている。フォークソングとして分類されるものもあり、人々の愛唱歌になっている。ここで、いくつかの曲を取り上げてみたい。①～⑤の５曲だ。

各自カラオケで歌ってみるのもよい。でも、歌詞の意味は、反戦歌らしく、殺伐としていたり陰鬱にさせたりするものがある。そんな深い意味を考えず、気楽に歌うほうがいいのかもしれない。あなたはそんな反戦歌よりも軍歌を歌うほうが、気分が高揚するかもしれないが。

（　）は歌われ始めた、おおよその年代を示す。

① 花はどこへ行った（１９５０年代）作詞作曲：Pete Seeger

この歌は「花はどこへ行ったのだろうという疑問で始まる。「以前はあんなに咲き誇っていたのに、だれ

が持って行ったんだろうか」という素朴な疑問なのだ。そして歌が進むにつれ、その原因が明らかにされる。墓に入った兵士のために、女性たちが墓前に花を手向けていたから、と恐ろしい因果関係に導いている。

戦いで死んでいった兵士が多数いるというのだ。あたり一面に咲いていた花がなくなってしまったほど、その数が多いというわけだろう。女性たちは若くして未亡人になったり、あるいは恋する人を失ったりしたわけであり、その悲しみは深い。その数も多いと推論される。

②風に吹かれて（1960年代）作詞作曲：ボブ・ディラン

淡々と歌い上げている。比喩的表現を多用し、難解なものが多いと言われているボブ・ディランの歌だが、これは明確に反戦の歌だろう。

彼は「無意味なことをどうして繰り返すんだろう。同じことを何度やったら、気がすむのだろう」という人生や動物の存在や、えいえいとした営みに疑問の念を抱く。そしてこの世界で繰り返されている戦争に思いをはせる。

その答えは？　ボブは答えを示そうとするが、「答えは風の中に吹いている」と、わけのわからないことを言って、はぐらかす。

〈何度繰り返すのかって？　答えは風に聞いてくれ。オレは知らんよ〉とでも言っている。

ピーター・ポール＆マリー（アンド）など、この曲をカバーする歌手たちは多い。彼らはきれいに歌いこなしているが、ボブ・ディラン本人は、ほとんどなげやりに、わざとへたくそに歌う。そこに味があるのかもしれないけれど。ひとつのエピソードとして、コンサート会場で観客から「もっとまじめに歌えよ！」と怒られたことがあったという。そんなとき、ボブはひるまずに「これはオレの歌だ。オレがいい加減に歌うのはぜんぜんかまわないのだ！」と言い返えしそうだ。批判には、どこ吹く風だろう。

もしもあなたがカラオケでボブのような歌い方をしたら、仲間たちから顰蹙（ひんしゅく）を買うかもしれない。

戦争が繰り返されるわけを、余計なことながら、私が答えれば、

「領土拡張意識の強い、戦争が大好きな権力者が、愛国的な人々を戦争に導くから」

③イムジン河（１９６０年代）作詞：朴世永、訳詞：松山猛、作曲：高宗漢

北と南の国境の川の一つ、イムジン河を主題にしている。イムジン河が清らかに流れている。水鳥は飛び交う。けれど、人は渡れないことに深い悲しみがある。

１９４５年、日本の敗戦に伴い、ソビエトとアメリカが競うように、半島の内部に進出し、軍事的に占拠した。そこで、それぞれ自分たちに都合のいい強権的な政府を樹立した。さらに数年後に起きた朝鮮戦争がこの地に深い断裂を作った。両国に政治的な対立が続く。国際的に当事国だけでなく、周辺諸国を巻き込んで一発触発の状態がまだ続いている。近年でも、北朝鮮がミサイルを日本海に打ち込んだりするから、日本政府が大騒ぎすることになっている。

特に北朝鮮では、誇り高き指導者を中心にし、そのまま世襲で独裁体制を維持・継続している。金（キム）一族が軍部を掌握し、閉鎖的な支配体制を築いている。「この国の支配者はオレだ」とでもいうように、人々を囲い込んでいる。国境警備を厳重にし、逃げ出そうとするものなら、収容所へ送りこむし、ひそかに国境線を超えようとすれば、背後から銃撃する。

分断された朝鮮半島の現実に、人々は嘆いている。離れ離れになった家族・親類・知人たちは、今では少なくなったかもしれないが、数多くいた。連絡を取るのも難しかったわけだろう。

この曲は、流れるような旋律や抑揚の変化があり、音楽に素養のない私でも名曲の一つに挙げる。歌詞にしても、原文の意をくんで翻訳したとされ、人々の心情を率直に言葉にしている。

私たちがカラオケで歌うとき、感情を込めて歌うのもいいし、さらりと歌うのもいい。

参考：ＮＨＫ総合テレビ【アナザーストーリーズ「時代に翻弄された歌　イムジン河」】２０２１年１２月４日放送

④戦争を知らない子供たち（１９７０年代）作詞：北山修、作曲：杉田二郎

軽快なリズムに乗せて歌い上げる。「ぼくたちは戦争を知らないけれど、平和を願っている」と主張する。戦争を実体験していなくても、戦争がどんなものか、わかっているんだ」と言っている。「軽々しいぼくた

ちだけど、若いからといって、軽(かろ)んじてほしくないね」

自己主張したい年頃なのだ。

言い換えれば、「ぼくたちは戦後生まれだし、戦争を知らないよ、知ってみたくもない。戦争が悲惨なことぐらい、わかっているんだ」

彼らは子供のころから、母からはＢ２９が飛んできて、その空襲で家々が燃え上がり、人々が逃げ惑ったり、一面が焼け野原になったりした話を聞いていたのだろう。私もその一人だった。

仮想的な会話――

「かあちゃん、どうしてアメリカ軍は日本の各地に爆弾を落としたの？」「それはね、彼らにとって日本人は、軍国主義にこりかたまった、どうしようもない国の人たちだったから、害敵として退治するつもりだったのよ。それまで日本人は武力で近隣諸国をずいぶん荒らしまわっていたからね。弱いものを相手にずいぶん悪さをしていたから、他国の人たちに恨まれたし嫌われた。連合軍に降伏した時、外地にいた兵隊や民間人たちは、現地の人に石をもって投げられように、追い立てられたから、命からがら引き揚げてきた」

「へぇー、アメリカ軍は桃太郎みたいに、悪い鬼を懲らしめたんだ」「日本は彼らを鬼畜米英といっていたから、どっちがどっちだか……」

父からは「オレは（徴兵検査で）甲種合格したんだ」と自慢話をするだけで（甲種合格したならば、まっ先に戦場に送られることを知ってか知らずか）、あとは口を閉ざした。軍隊で殴られてばかりいた話や、戦地で戦友が次々に死んでいった話をごくたまに漏らした。大きな物音にびくりとする人だった。

過酷な体験をしてきた帰還兵（復員者）たちは、多くを語ろうとしなかった。どの戦争でも、兵隊は戦地から生きて帰れれば良しとしなければならないが、その中には、傷病兵ばかりだったりする。精神を病んだ者も数知れず、人が変わってしまったような彼らの姿に、家族らは愕然としたりする。

彼ら、団塊の世代（戦後の数年間、ベビーブームで誕生した人たち）は、戦争の恐ろしさを親たちから吹き込まれている。この歌は、不戦の誓いでもある。

「祖父母たちや親たちの世代では、センソーをしょっちゅうしていたけど、ぼくたちの世代では決してしないよ。おとなになっても、センソーを知らずに暮らすんだ」と言っている。

⑤ イマジン（１９７０年代）　作詞作曲：ジョン・レノンとオノ・ヨーコ

これは世界的に有名な曲だ。最近でも平和記念の式典で歌われたりしている。歌詞からではわかりにくいが、平和を願うものであり、反戦の意味がこめられているのだろう。私が歌詞を概訳すと、

「この世に天国はないし、地獄もない。人々は空の下で今日を生きている。

国もないし、宗教もないことを想像してみたまえ。

そのために人を殺したり死んだりしない。

物を所有しない。そんな生活をキミは想像できないだろうけど、強欲にならないし、飢えもしない。

私は、いつか人々がいっしょになって、世界が一つになることを望んでいる。

みんなで世界を共有し、人々が平和に暮らすことを想像してみたまえ。

それは私だけの夢だろうか」

と諭すことをしみじみと歌い上げている。質素に、謙虚に生きることを、大胆に現実を否定して説いている。それはヒッピーの生き方を示しているのかもしれない。

なお、「レット・イット・ビー」も似たような調子の曲だ。レット・イット・ビーのフレーズをしつこく繰り返して、悲壮感を漂わせている。これも反戦歌の一つに挙げたい。「オレたちを支配したり排除したり、しないでくれよ」と哀願している。

「ゲット・バック」（１９６９年４月リリース）にしても、１９６０年代前半でベトナム戦争に消極的になっていたＪＦケネディ元大統領（在任 1961～63 年、ダラスで銃撃され死亡。この事件には重大な陰謀があったとされる）に代わって、その任に就いたテキサス州出身のジョンソン大統領（在任 1963～69 年）に対して、遠回しに「田舎へ帰れ！」と叫んだ曲だろう、と私は解釈する。

彼が、ケネディの遺志に反するかのように、ベトナム戦争を本格的に拡大させ、長期化（泥沼化）させた張本人だから。

おそらく、就任のときジョンソンは心の中で叫んだことだろうーー「弱気なヤローめ、テメーにやる気がないなら、オレが代わりにやってやる！」

１９６０年代後半になって、強気だったジョンソンだったけれど、しだいにベトナムで米国側の損失が大

きくなり、勝ち目がなくなったことに気づき、世論の強い反対にもあい、失意のうちに大統領を退き（再選の立候補をしなかった）、テキサスの牧場に引きこもった、とされる。ほんとに田舎に帰ってしまった。

ちなみに個人的な好みからいえば、ビートルズは、アップテンポのリズムに乗せて、困難や嫌なことを吹き飛ばすように、元気よく叫ぶ曲がいい。

仏像探訪・番外編

以前の仏像シリーズで、大仏や怒れる仏像などを紹介してきたが、その後に出会ったものにもいくつか特筆すべきものを見出したので、一部を追加紹介したい。画像がないものについては、あなた自身が、実際に所蔵されている美術館や寺院を訪れて視認してほしい。

①愛染明王・五島（ごとう）美術館（東京都世田谷区上野毛）

2019/1/17

２０１９年１月１７日に、何十年かぶりに五島美術館を訪れた。質の高い愛染明王像があるというので、見たいと思った。東急大井町線の上野毛駅から降りて歩いた。駅から４００メートルほどの近さだが、私はもう道順を忘れていたから、やや迷った。

目当ての愛染明王像は、観覧順序の最初のコーナーに展示されていた。これは五島美術館の中でも特別扱いされているのだ。全体的に黒光りし、顔は真正面を直視している。その怒りの表情で、人々を威圧する。もしも、これが動き出したならば、そうとうに怖い。

衣装類を含めて全身が精巧な完璧さで作成されている。聞きしに勝る造形美がある。大きさについて、巨大ではないにしろ、これで十分だろう。

ここに画像で示したらいいのだが、撮影禁止だった。

②麻布大観音・長谷寺（ちょうこくじ）（東京都港区西麻布）

2020/9/14

表参道から根津美術館（建築設計者のこだわりで、入り口が分かりにくい）に寄ってから、西麻布の長谷寺へ歩いた。ここに大観音があるとの情報を得て、いそいそと行ってみた。

その門には「大本山永平寺別院」「長谷寺専門僧堂」の表札が掲げられている。格式が高い寺なのだ。

門を入ると、右手に二層式の壮麗な切妻屋根をもつ建築物がある。観音堂だ。

私は戸を開けてこっそりと入ってゆく。鎌倉にある某寺のように、野暮な拝観料などは徴収していない。

内部は絢爛豪華だ。天井が高い。見上げるように私は見る。中央に立って、突出して大きい像が、もちろん麻布大観音だ。身の丈約１０メートルある。頭の周囲にいくつかの仏頭が配置されているから、これは十一面観世音菩薩像だ。

麻布大観音

赤銅色の肌をしているのは、珍しい。うしろには同じ色の、大きな楕円形の身光がある。右手に錫杖を持ち、左手に蓮華の挿された花瓶を持つ。

天井から何やら下がっているのは、花飾りだろうか。やや過剰な装飾だろう。これは再建されたものという。戦災で、旧来のものは寺もろとも焼失したという。

このお堂には、後ろの方に、等身サイズのいくつか仏像が並んでいる。その中で、左端の奥に筋肉質の立像に興味を持った。ふんどし姿で、たくましい。右手にこん棒を持っている。余計な「枠飾り」のために顔

が見えないが、おそらくこれは、鬼卒だろう、観音を引き立てる役をしているようだ。

鬼卒（？）像

③仁王像・大倉集古館（東京都港区虎ノ門）

2020/12/11

地下鉄千代田線・国会議事堂前駅から歩いた。道すがら警察官の姿がちらほらしているから、不審なマネはできない。

大倉集古館は、ホテルオークラの敷地内にある。一流の目利きをしたオーナーが、趣味と財力で集めたものを公開している。文化財的なものを多く揃えている。

その中で、建屋軒下に展示された仁王像一対が迫力満点だったことを特記したい。木造で、２メートルほどの高さがある。肌表面の彩色が落ち、変色している。部分的に朽ちているところもあったが、長い年月を経た証拠であり、かえってすごみを増している。南北朝時代の制作というから、６００年以上のものだ。

これも撮影禁止だったようで、写真に撮っていなかった。

④軍荼利（ぐんだり）明王像・東浪見（とらみ）寺（千葉県一宮町）

2021/1/28

軍荼利（軍太利とも表記する）明王像について、私にはこだわりがあり、近隣地域に点存しているその仏像のほとんどを見てきたつもりだ。と言っても、数はそれほど多くない。

それらは一年に一度程度、開帳されるだけの、秘仏であることが多いし、失礼ながら、辺鄙（へんぴ）な地にあることが多いから、隠れた存在だ。

１月２８日（木）の寒い日、千葉県一宮町東浪見（とらみ）に出かけた。この日が年に一度の縁日というべき日にあたり、秘仏が開帳される。午前中に行くスケジュール

を組んだ。外房の町だから、私にとってはかなり遠い地方の一つであり、めったに来られないところだ。午後には茂原へ行く予定にしていた。

外房線・東浪見駅から歩１５分。軍荼利山のふもとから、長い石段を上がってゆく。ここには「軍荼利山」の扁額がかかった鳥居があったりして、神仏習合の跡をとどめている。

東浪見寺の仁王像の一つ

東浪見寺の仁王門をくぐる。二体のユニークな仁王像が睨みを効かせている。独特のポースをしており、作風がおもしろい。しかし、木造の胴体が大きく割れて、不自然に傾いて立っているのが惜しい。

私と前後して参拝に来ていた人たちが、歩きながら「以前は、割れていなかったのに」と話をする声が聞こえた。境内を進むと、お堂が見えてきた。お堂の横の広場ではテントが張られ、地元の人たち５、６人が集まって焚火をしていた。

明らかに部外者の私がうろうろしていると、地元民の一人が、なまりのある言葉で声をかけてくれた。目的を話すと、彼は像のすぐ前まで近寄らせ、見せてくれた。お堂の天井や壁は、所狭しと、絵馬などで飾られている。

像は、鉄格子のなかに厳重に保護されている。しかし祭壇の奥は暗く、像の前に机（鏡のようなものが正面に置かれていた）があったりして、よく見ることはできなかった。これは木造で、１・５メートルほどの大きさであることが知られている。部分的に破損している。それでも、地元の人は大事にしている。これ以上の破損は避けたいという、彼らのあつい思いが込められているようだ。素朴な信仰がある。

見にくいけれど、フラッシュを避けた撮影をした。

あなたが軍荼利明王像を見に行こうとしたら、飯能市立郷土館にある軍荼利明王像が一番見やすいだろう。

これは高山不動尊にある像のレプリカで、実物と同一サイズ（高さ２３０センチ）の身の丈だから、迫力がある。以下にその画像を掲載する。

軍荼利明王像
千葉県一宮町東浪見

軍荼利明王像
埼玉県飯能市郷土館 2022/7/24

ついでながら、飯能市の近傍の山にハイキングに行ったとき、飯能市大河原地区の軍太利神社によってみた。軍太利神社とは、期待がもてる名だ。

山のふもとの一角に、他のお堂とともにそれがあった。しかし堂内には入れず、戸の隙間から覗（のぞ）いてみるだけだった。中が暗かったから、肉眼ではよく見えなかったが、写真を撮ってみると、祭壇の上に、３０センチほどのミニチュアサイズの軍荼利明王像がかろうじて写っていた。両腕を胸のところでクロスする軍荼利明王の特徴があった。この像などは神社にあるもの

であって、仏像ではなく「神像」に分類されるべきものかもしれない。守り神として崇められている。

⑤江戸六地蔵・真性寺（東京都豊島区巣鴨）

2021/12/11

「おばあちゃんの原宿」として高名な巣鴨（すがも）商店街に、後学のために行ってみた。この商店街は地蔵通りと言われており「とげぬき地蔵」があることでも有名だ。山手線の巣鴨駅北口に出て、その西側に直交する広い国道１７号・白山通り）を渡る。その歩道を北へ１００メートルほど歩くと、巣鴨商店街の入り口がある。地蔵通りはその国道とほぼ平行して伸びている。

そこへ入ってゆくと、すぐ左手に真性寺があるので、寄ってみた。境内に入ってゆくと、近年建て替えられたらしい立派な本堂の前に、青銅製の大きい地蔵像がある。これが「とげぬき地蔵」ではない。それがあるのは、もっと道の先にある高岩寺だ。これは、江戸六地蔵*1の一つとして、仏像マニアの中ではよく知られているものだろうが、私はここにその大きい地蔵像があることを事前に知らなかった。

驚きをもって見上げた。２メートルほどの高い台座の上に座り、どっしりした青銅製の坐像だ。頭に大きな笠をかぶった姿は、尊顔を隠し気味だ。赤いよだれかけをつけているのは、地蔵の「決まりごと」なのかもしれないが、不思議に思う。

真性寺の地蔵像
江戸六地蔵の一つ

*1. 江戸六地蔵、丈六サイズで、同一様式で作られた青銅仏。ただし、笠の形が異なるなど若干の違いはある。以下に寺名と（）内に簡単な場所を示す。1～6の順に巡拝するのが、江戸っ子の習いらしい。

1番　品川寺（南品川３丁目）笠をかぶっていない
2番　太宗寺（新宿２丁目）
3番　真性寺（巣鴨３丁目）

4番　東禅寺（東浅草2丁目）
5番　霊厳寺（江東区白川1丁目）
6番　永代寺（深川3丁目）碑だけある。本体は現存せず。明治期に廃仏毀釈運動により壊された。

私はこの道路に沿ってぶらぶらと歩いた。それなりに活気があり、ものめずらしさがある。もちろん「とげぬき地蔵」の高岩寺にも寄ってみた。ここは参拝者が絶えない。若い人の姿もちらほらしている。

私はさらに進み、商店街入り口から直線的に約1キロ先にある大正大学の観音堂を見に行った。

大正大学は仏教学部のある総合大学だ。意外と近代的な校舎が建ち並んでいることが目を引く。

観音堂は大学の施設の一部だが、一般公開されているから、不審者も入れる。この観音堂は、近年に作られたもので、外観は五重塔的だが、内部の階段がらせん構造（栄螺（さざえ）堂ともいう）になっており、一本の通路で上がり下がりできる。中にいくつかの新旧の仏像も置かれており、間近に見られる。

大正大学の観音堂（栄螺（さざえ）堂）

⑥首切り地蔵・延命寺（東京都荒川区南千住）
2022/2/27

松戸方面に行くために常磐線の電車に乗っていたら、南千住駅の手前のあたりで、窓の外に大きな地蔵像が見えたので、大仏を多く見てきた私としては気になった。その帰りに、夕刻になって南千住駅に途中下車した。駅から歩いてすぐのところに、線路際の墓地の中

にその地蔵像があった。
南千住駅は、私が若いころ、通学に利用していた駅だったから、毎日のようにこの仏像を見ていたはずだが、そのころはこれにほとんど気に留めなかった。

首切り地蔵（南千住駅の近くの延命寺）
不審者が見つめていた

首切り地蔵の名では、人聞きが悪いのだが、調べてみると、由緒のあるものだった。この辺は江戸時代、近くに小塚原刑場があったところであり、死刑者の霊を慰めるために、１７４１年（寛保元年）に延命地蔵として建立されたものというから、かなり古い。
延命寺の墓苑の入り口付近にあり、しっかりした台座の上に、風雪に耐えながら、座っておられる。参拝者が時々訪れるようだ。
この地蔵像は、花崗岩でできているという。これだけの大きなものを石で作るのも大変だったろう。近くで見ると、全体が一枚岩ではなく、複数の岩を組み合わせた箇所がある。ひび割れのようにも見える。
なお、延命寺の隣に回向院（小塚原回向院）があり、遊女たちの無縁墓があるという。入り口に、供養のための地蔵像があり、境内に吉展地蔵尊なるものもあった。吉展と聞けば、あの誘拐事件に関係したものだろうか、と思いを巡らす。

⑦谷津大観音・寿徳寺（東京都北区滝野川）2022/8/5

板橋界隈を歩こうとして地図を見ていたら「谷津大観音」と記された地点があった。ちょうど目的地へ行く途中にあるので、寄ってみることにした。
板橋駅から北東へそぞろに歩いて行くと、石神井川を渡る橋についた。その名を欄干の銘板で確認すると、

「観音橋」だった。方向感覚を惑わすような、旧態依然とした街並みの路地を通ったから、方向に自信がなかった。迷わずにたどり着けたことに安堵する。

川を渡ると、まもなく左手に、大仏が見えた。公園のような区域に露座している。

「うーん、これは大きい。これは都会にまれな大仏だ」と心の中でつぶやく。像の部分だけで、高さ5メートルありそうだ。石神井川沿いにあって、閑静な住宅街の一角だから、立地的に意外性がある。

谷津大観音

観音像というより、この壮健な、どっしりとした体形は釈迦如来などの大仏のイメージに近いので、一瞬疑ったが、やはりこれは観音であり、頭部を見れば、すぐにそれとわかるし、左手に一輪の花を持っている。しっかりした八角形の台座の正面に貼り付けられた銘板で「谷津大観音」であることを確かめた。

平成２０年（２００８）１２月の開眼とあるから、比較的新しい。ここからやや離れたところにある寿徳寺の方でこれを管理している。

ちなみに、この寺は、板橋駅前の近藤勇墓所も管理しているという。新選組に興味のある人は、それぞれ訪れるとよいかもしれない。私は、板橋駅に降り立って歩き出したとき。小さな公園の一角のような場所に気づいて、興味半分でこれを見た。

その寺の庭にある珍しい石像に、私は興味を持った。右はインドで出土したアショーカの石柱頭部だそうだが、そうとうに重いのに、どこから、どんなルートで、こんな異国的な石像を持ってきたのか、不思議な気がした。この寺の住職の趣味というべきか。インドは仏教の発祥の地だけれども。

⑧ぐんだり明王像・證誠院（千葉県松戸市みのり台）2022/8/28

８月２８日（日）私は例によって早起きして、いそいそと「ぐんだり明王像」を見に出かけた。松戸市の證誠院では、８の付く日に、名のある人によって近年制作されたという「ぐんだり明王像」が開帳されるというので、その日に合わせた。１２時からだったが、余裕で松戸市に到着した。

新京成線に乗り換え、数駅先のみのり台駅から、北へ５分ほど歩いてゆくと、證誠院がある。

インド様式の石像
寿徳寺の境内で

證誠院の仁王門
立て看板が目立つ。
一対の仁王像が造形的によかった。

真言宗智山派の寺だという。門の前の立て看板や、

張られているチラシを見ると、なかなか活動的な住職が、寺を盛り上げようとしている様子が伺える。墓地の営業もしっかりやっている。

長いまっすぐな参道を進むと、左側にぐんだり明王のお堂がある。二層式の屋根を持つ。中に大きな像があることを予感させる。

私は、それを拝観するだけの目的だったが、お焚き上げの儀式に参加することになった。拝観するためには祈祷をしてもらう必要があった。それは拝観料として想定していた金額よりはるかに高い出費（五千円）になったが、しかたがない。

そのお堂の前で、対応してくれた寺の関係者たち数人（檀家らしいまじめそうな人たち）の前で、手続きを進めた。個人情報一式を記入しなければならなかった。さらに、祈祷してもらえる項目が３０ほどあって（ほとんど四文字熟語になっている）その中から選ぶ。そんなことは考えてもいなかった私は項目の最初のほうにあった「健康保全」とやらを選んだ。それを、大きなお札と、火にくべる木片に書き記す。

それがすむと、控え室で、儀式の参加する作法について説明を受けた。参列者は、私と、寺に写経に来ていた二人の方、合計３名だった。彼らは傍観者としての参列だった。

ほぼ定刻になって太鼓が打ち鳴らされると、控室から堂内に通じる戸が開けられ、堂内に導かれた。中は暗いが、数本のろうそくの灯りで、祈祷の主役、導師と、太鼓打ちの人など寺関係者の男女数名が、周りにいることがわかる。軍荼利明王像の前に、導師が対峙するように護摩壇の前に座っている。それは銭湯の番台ほどの高さがある。左側に客たち用の椅子が並べられており、横から祈祷を見る形だ。私は一番前の列に座らせられた。

大きな太鼓の音と、導師の先導で、寺関係者たちは声を合わせ、「呪文」を唱え始めた。彼らは力強く発声した。理解できる日本語だが、不信心な私の頭には入ってこない。カルト的な儀式の中にいて、私は落ち着かなかった。

お焚き上げの行法は、日本では古くから行われているもので、その霊験はともかくとして、厳粛に立ち会わなければならない。

ろうそくの明かりだけで、照明も窓の明り取りもないから、暗くて肝心のぐんだり明王像がよく見えない。ほとんど暗闇の中で、導師が囲炉裏のような中の護摩木に着火した。焚き上げの火で、すこしは明るくなる

だろうと期待していたが、焚き上げの火が燃え盛っても、あまり状況が変わらなかった。

明王像は台座の上にあり、目線よりやや高い位置にある。明王像の体の輪郭はわかるにしても、明王の顔の表情が見えない。像は等身大の大きさ（光背を含めて2メートルほど）で、木製の浮き彫（レリーフ）りだった。つまり、後ろ半身が、大きな火炎形の光背に張り付いた形になっている。黒々とした火炎であり、一部が赤で彩色されていることでわかる。鋭い槍の穂先を前方に1メートルほど突き出しているのが、立体感を出すための工夫の一つだろう。

ぐんだり明王像イメージ図

左足のひざを曲げ、中に浮かせている。右足をまっすぐに踏ん張るように伸ばす形は、蔵王権現のスタイルだ。私は軍荼利明王像にはこういう作風もあることは知っていたが、珍しい。

両肩の上に黒いものが載っている。首が三つあるように見えるが、よくわからない。軍荼利明王の特徴的な、胸のところで一対の手をクロスするポーズをしているはずだが、実はこれもはっきりしない。

自分の番になり、立ち上がって、自分の木片を導師に渡し、木札を火にかざして、霊気を当てるしぐさをする（その木札は家に持ち帰る）。そして教えられた手順どおり、像の前で焼香をして、そのまま退出したが、儀式がまだ続いていたから、途中でお堂から追い出された気分が生じた。

ぐんだり明王のお堂の屋根は二層式で、高さがある。大きな仏像が格納されていることを期待させたが、単に焚き上げの煙がこもらないようにする工夫だった。

ここでも撮影不許可というけちなことを言っていた。私にとってみれば、大金（たいきん）をはたいたのに、暗すぎて明王像がよく見えなかったことに一番の不満を抱いた。紙袋入りの返礼品的なものをもらったが、割が合わない。そんな不満を持ったとしても、罰は当たらないと思うけど。

⑨勢至菩薩像・浄光明寺（神奈川県鎌倉市扇ガ谷）

2022/9/25

私は神奈川県立歴史博物館に行く機会がときたまあって、展示されたものを見て回る。その中で一番気に入っている常設展示物が、中世のフロアにある勢至菩薩の坐像だ。ほとんど等身大の大きさがある。レプリカながら、精巧なもので、よくできている。首を左（正面向かって右）に傾げるポーズがいい。右手に一輪の花を持つ。もしもこれが直立不動、あるいは正座していたら、おもしろくない。

顔の表情をみると、ほとんど目をつぶり、感情をあらわしていないが、憂いているようでもある。確かに「アンニュイな美しさを放つ」と表現する向きもある。その表情やポーズはむしろ、セクシーと言いたい。

衣の襟を緩やかにして、みぞおちあたりまで開いている。胸は平らで、ふくらみがないことが惜しまれるかもしれない。その衣は、あぐらの形で組んでいる両足を隠すように包んでいる。

光背として、頭の後ろから、何本かの細い棒が「放射状に並び、傘のような形状になっている。簡素ながら、光をよく表現している。

歴史博物館に来るたび、この観音像を眺めているうちに、実像を見たいという思いが芽生えてきた。あるとき、この実物が鎌倉にあることに気づいた。

〈鎌倉なら、遠くない。鎌倉の浄光明寺？　聞いたことのある名前だが〉

浄光明寺といえば、大型のやぐら（主に中世に造られた、葬送のための横穴）があるという情報を得て、私は見たいと思っていた寺の一つだ。やぐらを見て回ることには少々飽きていたから、数年見送っていたが、今般に行ってみることにした。

台風が通り過ぎた日の翌朝、９月２５日（日）に二宮に出て東海道線に乗り、大船で乗り換えて鎌倉駅に１０時ごろ降りた。この日が公開日であることを確かめていた。行楽日和であり、駅ではいつにも増して人手が多かったが、扇ガ谷方面へ行く人は少ない。

ほどなく浄光明寺に着き、奥に進むと、木戸番の人に拝観料２００円を払った。高齢の彼は説明熱心で、案内人を兼ねていた。私は話しかけられ、初めてここに来たというと、彼は近くの収蔵庫のところで境内の配置や歴史を一対一で説明してくれた。まもなく次の人がやってきたから、彼は木戸番に戻った。

その真新しい収蔵庫（耐火性のあるコンクリート製）は扉が大きく開けられていて、大きめの阿弥陀如来像が中央にどっしりと置かれている。両脇の観音像２体とともに国の重要文化財に指定されている。阿弥陀三尊像としてセットになっている。阿弥陀如来像は大きい目を半眼にして正面を見つめている。でも、これはかわいげがない。押し出しの強い像で、特有の存在感がある。

私の目当ての勢至観音菩薩像は、控えめに、向かって左側にあった。右側にも、似たような観音像（観世音菩薩）がある。対称的なポーズをしている。

でも、来館者は、入り口付近の一歩入る範囲内に限定されるから、仏像たちとは距離がある。博物館で見るような近さにはない。

実物には古さがあり、全体的にくすんでいるから、美を比較してしまうと、レプリカの方に分がある。この勢至菩薩が体を左側に傾けているのは、これが脇侍（きょうじ）だから、中央の仏像を引き立てるために、一つのポーズをとっている。いずれにしても、単独で展示されている方が、よく見えるのかもしれない。

例によって写真は掲載しないが、実物でもレプリカでも、あなたの都合で、どちらかを見に行くとよい。

この寺は、収蔵庫だけでなく、仏殿の中の仏像、野外の石造などもあって、見て回った。やぐらや古い墓なども見てきた。ただし、まだ扉が開けられない非公開の像があって、心が残るところもあったが、私はおおむね満足して寺を後にした。

午後からは、平塚に用事があった。久々に劇団の演劇でも観ようと思った。